

E・H・ノーマン＝鈴木安蔵の戦後初会談

－その意義と事実関係について－

中野昌宏

1. はじめに

日本国憲法成立史の文脈で近年再び注目されているのが、GHQ 草案の下案となったとされる「憲法草案要綱」、通称「憲法研究会案」の存在である。憲法研究会とは、高野岩三郎、森戸辰男、岩淵辰雄、室伏高信などからなる民間の学者・評論家のグループである⁽¹⁾。

敗戦後間もない当時、近衛文麿の憲法草案起草に触発されて、憲法研究会以外の私人や団体等が私擬憲法案を提出する例は多かったが、これまでの憲法成立史の諸研究⁽²⁾によれば、この憲法研究会案の重要性は別格である。というのも、内容的に現行憲法と一致点が多く、GHQ のマイロ・E・ラウエル (Milo E. Rowell) 法規課長の「民主的で受け入れられる」とした好意的な報告書⁽³⁾、および証言テープ⁽⁴⁾もあり、GHQ の草案作成過程でこの案が参照されたことが確実視されているためである⁽⁵⁾。この憲法研究会の中心的人物が、当時在野の憲法学者・鈴木安蔵である。

日本国憲法成立の過程に、1人のカナダ人が少なくとも3度関与している。そのカナダ人とは、当時最高の日本学者でもあった外交官、E・ハーバート・ノーマン (E. Herbert Norman) である。ノーマンは終戦直後にカナダ代表として日本に派遣されてきたが、その日本への造詣と学識をダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur) に評価され、GHQ 内の対敵諜報部 (CIS) に配属されることとなった⁽⁶⁾。

ノーマンの最初の「関与」は、ごく控えめであり、直接的ですらないものの、しかし新憲法の内容に関わる重要な関与と見られている。彼は来日直後の1945年9月に、旧知の鈴木安蔵と会談し⁽⁷⁾、新憲法制定について重要な示唆をしたとされている。以下、1977年の鈴木 of 回想を引用する。

10月2日には、わたくしは「憲法改正の原稿を書く」と日記に記している。すでに敗戦後の日本の再建が、したがって明治憲法の検討が問題となったことを示す。また、いちはやくおこなったハーバート・ノーマン氏との会談によって、これについてい

くつかの示唆をうけたことも思いおこす。

戦前まだカナダ大使館の書記官であった氏が、わが国の明治維新についての研究にあたって、わたくし自身を訪ねられて以来の知人であり、自由民権運動についてのいくつかの資料を紹介したりしたが、敗戦後、連合軍総司令部にカナダ代表として参加し来日された。都留重人⁽⁸⁾氏の案内で来訪され、これからの日本の再出発について、かなり立ち入った意見の交換をした。そのとき氏がきわめて控え目にではあったが、日本の天皇制、明治憲法などについてのわたくしの意見もきかれ、なおイギリス的君主制について、イギリスが過去に2回も民主革命を経ていることの意味について語られた⁽⁹⁾。

このように鈴木は、ノーマンからの示唆について、憲法起草への影響があったとしている。このときのノーマンから鈴木への質問は、「国体」を、つまり天皇制を今後どうするのか、という点に関するものだったという⁽¹⁰⁾。

ノーマンはまた、1945年11月、近衛文麿が新憲法草案の作成に関わることを厳しく批判する報告書を書いた⁽¹¹⁾。さらに彼は、1946年2月からワシントンDCで開かれた極東委員会において、憲法問題の討議に参加している。これらの憲法問題への関与もそれぞれ重要であるが、本稿ではこれらを扱うことはできない。

本稿では、鈴木安蔵とノーマンのこの会談についてのみ、これまで仔細に研究されてこなかったブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)図書館貴重書・特別コレクション(RBSC)所蔵のノーマンの日記と、一橋大学経済研究所資料室所蔵の資料に含まれる都留重人の日記を検討した結果判明した事情について、以下に明らかにしていきたい。

2. 会談日程について

2.1. これまでの諸説と本稿の示す新説

鈴木安蔵がノーマンから直接示唆をうけたという会談については、その日時についてこれまで複数の説があった。

まず日本国憲法制定史の権威である古関彰一は、1945年9月22日(土)とする。これは古関が1981年7月20日に鈴木本人にインタビューをした折、鈴木は日記を繰りながら話した⁽¹²⁾との事実が根拠であり、「ある日突然、ノルマン氏が都留重人氏の案内でやってきた」⁽¹³⁾というのが鈴木の説明である。

いっぽうノーマンの右腕とも呼ぶべき大窪愿二⁽¹⁴⁾は、ノーマン全集第4巻収載の年表に9月25日(火)と記している。この日付にも根拠はある。ノーマンが妻アイリーン(Irene)に書き送った手紙の日付が25日であり、その中に「今日、鈴木安蔵に会った」⁽¹⁵⁾

と書かれているためである。ただ、おそらく実際には、会った当日に手紙を書いたとは限らないので、総合的に見て、これまでのところ古閑説が強かったのであろう。

筆者が2016～17年にかけて調査したUBC所蔵資料E. Herbert Norman fondsのうち、上記アイリーン宛の手紙のほか、この問題に関係の深いものとして、冒頭に「東京旅行(Tokyo Trip)」と書かれたメモの束⁽¹⁶⁾(以下「ノーマン日記」と呼ぶ)がある。このメモの内容を検討した研究を筆者は寡聞にして知らないが、戦後すぐのノーマンの思考や足取りがわかる貴重な資料である。このメモによれば、「鈴木安蔵教授と会った(Met Prof. Suzuki Yasuzo)」とあるのは9月22日(土)ではなく23日(日)となっている。この23日というのが本稿の提唱する第3の説となる。

2.2. ノーマンの日記

ノーマン日記によれば、22日(土)は、東京帝国大学とくに明治新聞雑誌文庫を訪問し、ノーマン旧知の、当時そこに寝泊まりしていた宮武外骨らと会話し、神田の書店を覗いた等とある。日記の手書きの筆跡がかなりの悪筆で、判読困難かつ文法不完全であるが、可能なかぎり補完しつつ翻訳すると以下のようなになる(判読できない部分は____とした。またカッコ内に固有名詞を補った)。

〔東京〕帝国大学を訪問。高木〔八尺〕⁽¹⁷⁾は不在。明治〔新聞雑誌〕文庫に立ち寄る。自由民権運動に関する左派・リベラルの良い論文雑誌は全て保存のため山形に送った、と西田長壽⁽¹⁸⁾氏。宮武(廃姓⁽¹⁹⁾外骨)が裏手から表れ、我々を見て喜んだ。彼の家は焼かれ、図書館の地下に住んでいる。軍閥に対して怒りを表し、「軍閥よく____られてください」と言う。

明治の本を何冊か購入。神田の一誠堂、巖松堂はいまだによりコレクション⁽²⁰⁾。

25日付アイリーン宛手紙⁽²¹⁾はここから書き起こしたと思われ、内容がほぼ一致している。上記で判読できなかった部分は、「貴方が、軍閥の連中を地獄に叩き落としてやってほしい」ということを述べているとこの手紙から推測できる。

他方、外骨の日記は、その甥の吉野孝雄により『外骨戦中日記』として公刊されており(以下「外骨日記」と呼ぶ)、1945年9月22日から25日までは次のような記述となっている。

9月22日 土 晴 米兵3人「三代美人」
23日 日 晴 「芝居」ハガキ藤本へ
24日 月 晴 米兵2人 隣室能子
25日 火 晴 「病院」成る⁽²²⁾

外骨の記述はほんとうに一件につき一言ずつである。「三代美人」は藤本氏に譲った絵葉書のタイトルで、ノーマンとは無関係である。ノーマンは「我々を見て喜んだ (delighted to see us)」と複数形で自分たちを記述しているので、この「米兵 3 人」が (実際には米兵ではないものの) ノーマン一行を指すと考えて矛盾はない。つまり 22 日についてノーマン日記、アイリーン宛手紙、外骨日記は整合しており、鈴木安蔵と会ったという記録はそこにはない。

他方「鈴木安蔵と会った」と書かれているノーマン日記 23 日の記述は、レターサイズの手書きのノート 5 ページにもわたり、当然ながらノーマンの発言よりも鈴木氏の発言が詳しく記録されている。

2.3. 都留重人の日記

ここでさらなる確認のため、現場に居合わせた都留重人に着目してみた。ノーマンと鈴木安蔵の関係を重視している原秀成は、都留重人からの私信をもとに「この当時、都留重人は日記をつけておらず……」⁽²³⁾と記述しているが、筆者自身で念のため調べてみると、都留重人が学長を務めた一橋大学の経済研究所資料室に、ちょうどこれらの日の出来事が記述されている大学ノート型の日記 (以下「都留日記」と呼ぶ) が実は存在することがわかった。

都留日記 22 日の記述によると、ノーマンら 3 人を招いたのは夕食時であり、ノーマンの日中の動向は書かれていない (以下旧字体は新字体に修正した)。

……夕食にはノーマン、ウッツワース、ニーランズを招いて寿焼。途中クリベージュをしたりして和やかに一夕を過ごす。日本語ローマ字化、および日本式・ヘボン式の問題でノーマンと議論。ノーマンはいずれの問題においても保守的見解を支持。三人は 11 時半まで腰を揚げない (24)。

外骨日記 22 日の「米兵 3 人」とは、おそらくこのノーマン、ケン・C・ウッツワース (Ken C. Woodsworth)、D・E・ニーランズ (D. E. Neelands) の 3 人であろう。彼らはいずれもカナダ人であるが⁽²⁵⁾、英語の話せない外骨⁽²⁶⁾から見れば米兵も同じだったろう。彼らは 22 日 (土) 日中に帝国大学に立ち寄り、高木八尺の不在を確認したのち、明治文庫に立ち寄り、そこで旧知の宮武外骨および助手の西田長壽と再会し (日本語で) 会話をした。そして神田の書店に立ち寄った。都留重人宅⁽²⁷⁾に夕食に招かれ、夜遅くまで歓談した。かつ、3 人はそのまま宿泊したらしい。翌日 23 日 (日) に「ウッツワース、ニーランズ最後の夕」とあるのでこの 2 人は 23 日まで滞在したと考えられ、ノーマンだけは翌午前中も都留と行動しているので、さらに滞在を続けていると読める。

整理すると、夕食に招かれた3名はその晩宿泊した。翌23日の午前中、鈴木安蔵が都留宅を訪ねてきてノーマンと再会、新日本建設について都留重人も交えて立ち入った議論をした。以上が真相のようである。

また都留日記24日には「午前中、エマソン、ノーマンとヂープで帝大にゆき、神田、本郷の古本屋を歩き、高木教授と大学の食堂で中食をしたゝめる」とある。ならば外骨日記の「米兵2人」とはジョン・K・エマーソン(John K. Emerson)とノーマンであろう。一件一言の原則により、都留のことは省略されたようである。

2.4. 会談日程の整理

今回筆者が参照したノーマン日記も都留日記と、既知の全ての情報を総合すると、問題の日付は9月22日ではなく23日であったと考えられる。また鈴木自身や古関が述べているように都留がノーマンを連れて鈴木を訪ねたのではなく、実はノーマンが宿泊している都留宅(和田邸)に鈴木が訪ねてきたのであった。

以下に1945年9月22～25日のノーマンおよび都留重人の足取りをまとめ、括弧内に根拠文書を示す。

日時(1945年)	午前	午後
9月22日(土)	ノーマンら3名、東大で高木八尺と会えず、宮武外骨と会う〔ノーマン日記、外骨日記〕	ノーマン、ウッズワース、ニーランズ、都留宅の夕食に招待される。夜11半頃まで歓談〔都留日記〕
9月23日(日)	鈴木安蔵が都留宅を訪問、ノーマン、都留と会談。天皇制の問題などを議論 〔ノーマン日記、都留日記〕	夕食後ノーマンが都留宅に迎えに来て公使館へ。ティルトン大尉らとブリッジ。ノーマン除くウッズワース、ニーランズはこの日まで都留宅に宿泊〔都留日記〕
9月24日(月)	ノーマン、エマーソン、都留の3名で東大、神田古書店街を訪問。高木八尺と昼食〔都留日記〕	都留、太平洋協会にて山田文雄と会談、帰途松尾松平に会い、IPR再建のことなど話す〔都留日記〕
9月25日(火)		都留、ノーマンを連れ平野義太郎、風早八十二を訪ねる。商大の上田辰之助も同席〔都留日記〕

このようにノーマン日記、都留日記、外骨日記は相互に矛盾してはおらず、整合しているが、鈴木証言(会談は22日とする)だけがそれと矛盾している。また、鈴木記憶は安定的で、複数のテキストで何度も、都留がノーマンを連れてきたと書いている。これはおそらく、前に書いた文章をもとに後の文章を書いているためであろう。ノーマンと都留が鈴木宅を訪ねた機会も確実にあり、その折の写真(鈴木宅にて、ノーマンと都留が2人で写っている写真)も残っているが、逆に鈴木側がノーマンを訪ねた記憶もまた、

鈴木は語っている⁽²⁸⁾。したがって、この日については鈴木の記事違いという可能性も十分ありうる。

憲法研究会案の内容につながったかもしれない注目すべきこの機会は、ノーマンと都留の日記が示すように、やはり 23 日に鈴木側がノーマンを訪問したと見るのが、最も整合的である。

3. 会談内容について

3.1. 国体ないし天皇制の問題

言うまでもなく、この会談で何が話されたかのほうが本質的な問題である。どんなやりとりがあったかについて以下見ていきたい。

これまで知られてきた文献によれば、鈴木は、自身が衝撃を受けたというノーマンの質問を、会談後すぐの時点、すなわち 1945 年の時点で次のように表現している。

日本憲法に関して、私の第一回会談の相手は某外交官であったが、左のごとき質問を受けて、前述のごとく私は、憲法問題の根本的再検討の必要を痛感した。

- 一、国体護持を日本国民が希望するにしても、従来、国体の名の下に、あらゆる反動的勢力が横行し、封建的帝国主義的国家が強行されて来たことを考へるとき、もし依然国体問題が無批判のまゝに放置するならば、再び国家主義的勢力ないし風潮が、国体護持の名分の下に結集し強化する危険がある。徹底的に、「国体」の根本的批判をなさしむべきが日本民主主義化の前提と思ふが如何。
- 二、「国体護持」を認むる結果、日本民族は、依然万国に比類なき優秀民族なりとの根拠なき自負心を捨てず、真に謙虚な国際社会の一員たる再出発をなしえないと思ふが如何⁽²⁹⁾。

従来より日本の超国家主義団体・右翼勢力の研究もしていたノーマン⁽³⁰⁾のこの質問を受けて鈴木がどう考えたかということを含めて、後の憲法調査会(1957～1964年)の調査において、鈴木は次のように語っている。

で、憲法問題については、ノルマン氏とは話しました。私は、こういう、コンスティテューショナル・モナーキーのような案を示し、これで行く他はないと思うと言いましたら、遠慮深そうに、それで、日本の民主化ができるだろうかと言うわけです。どういうわけだと言ったところ、イギリスでも、二度のリボリューションを通過しておるので、やはり、いっぺんでもそういう過程を通らなければ、モナーキーのデ

モクラティゼーションは出来ないんじゃないか、しかしこれは、全く自分のオピニオンで、あなたに、かりにもどういうふうにしろということは出来ないということを書いて、私は成る程と思ったわけです。

そこで、私は、この時、高野先生の思い切って共和制にしなければいけないというご意見はもつともだと思いました⁽³¹⁾。

これは「はじめに」に引用した 1977 年の証言と明らかに一致しているが、もう 1 箇所、同趣の引用を示しておきたい。1982 年時点の証言である。

ただ私どもも当時においては、共和国をストレートに主張することをしなかった。たしかに天皇は国家的儀礼を司るというふうに弊害のないかたちになりましたが、完全な共和国態勢には踏みきれなかったのであります。

終戦後、カナダの代表として GHQ にきて、日本について専門的な研究をしていたハーバート・ノーマンさんに、あるとき「きみたちの憲法草案も共和制ではないが、どういうわけだ」と質問されたことがありました。私が「いまの状態いきなりそれを持ちだしても国民的合意を得ることがむずかしいからだ」と答えましたところ、「イギリスでも立憲君主制というかたちをとっているが、ピューリタン革命等の近代革命を経ることによって、君主は日本におけるような存在ではなくなっている。そういう判断が一般化している。しかしきみたちの国ではそういうことがないじゃないか。いまこそチャンスなのに、またしても天皇が存在する改革案なのか」ときびしく反論されました。これは親しい友人であったから遠慮のない議論になったのでありますが、私はそういわれて非常に愕然としたのであります⁽³²⁾。

一連の鈴木証言は、ノーマンの質問が控えめだったのか厳しいトーンだったのかといった点を除き、数十年の年月を超えてほぼ内容一貫している。今後の日本再生についての鈴木証言の立場は、天皇制を残した立憲君主制をとること、であった。これに対しノーマンは、それで本当に日本の民主化ができるのか、保守的・反動的なものは今後再結集しないか、民族的優越性から導かれる帝国主義思想の復活はありえないのか、との疑義を呈した。当初この点に楽観的だった鈴木は、このノーマンの質問により改めてその危険性に思い至り、認識を修正し、「根本的再検討の必要性を痛感」した、ということだろう。ただし憲法研究会案では、鈴木をはじめとするメンバーは、結果的に共和制は採らなかった。高野岩三郎一人が、独自案として共和制憲法案を示したにすぎない。

3.2. ノーマン日記と都留日記にみる鈴木の見解——「中間層」の台頭の必要性

ここまでは従来から知られている内容だが、今回筆者が発掘したノーマン日記と都留日記(23日分)によれば、この会談当時の鈴木ของ考えがもう少し詳しくわかる。いずれもノーマンや都留の見解よりも、鈴木の見解が中心に書かれているからである。

都留日記の翌日23日(日)の記述は以下のとおりである。

午前、鈴木安蔵氏来り、ノーマンと会ふ。ヴァンシターチズム⁽³³⁾に同氏が賛意を表したのは寧ろ意外とする所。国民の反動性、保守性、後進性というものに同氏は非常に強く印象づけられてある様だ。一君万民と云ふも、一君と万民のとの中間に新たなる指導的中间層が出てこねばならぬ。それは知識階級の一部、労働者の有能なる者等によって占めらるべきものである。日本は英国の様になるべきであると思ふ——等と云はれたるあたり、英国労働党の綱領に近いものを考へて居られるらしい。終戦を可能ならしめた日本的なものが、保守的・反動的なものゝ結集手段となりはしないか、又、それが民族の優越性の概念と結び付いて再び帝国主義的思想を胚胎させはしないか、等といふが如き重要な問題に関しては、同氏は寧ろ楽観的である。……(以下略)⁽³⁴⁾

以上のうち、「終戦を可能ならしめた日本的なものが、保守的・反動的なものゝ結集手段となりはしないか、又、それが民族の優越性の概念と結び付いて再び帝国主義的思想を胚胎させはしないか」の部分が、ノーマンが呈した懸念である。鈴木はこの懸念に対しては楽観的だったように都留には見えた。しかし鈴木自身は、ある程度衝撃を受けていたということになる。

鈴木の考えでは、天皇制を残したうえで、一君と万民の中間に位置する「中間層」(前衛的知識人、進歩的労働者などで構成される)が台頭しなければならない。この集団が、人々を徐々にリードしていき、中長期的に民主主義を達成していくというヴィジョンである。ノーマン日記にも同様のことが記されている。

鈴木は、日本にとっての希望は、政府官庁における中間層の台頭だと考えている。前衛的知識人、進歩的労働者など。この層は、帝国軍と大衆のリンクとして機能するだろう。日本の大衆の後進性のゆえ、反動的な官庁や宮中の指導者を逮捕し、進歩的中间層に入れ替える必要がある。鈴木が考えるに、この知識人・労働者による官庁が大衆を導いていかなければならない。……西側の軍は、反動的要素をパーズする助けにはなるが、鈴木が希望するのは、もちろん日本人が進歩的中间層を形成するイニシアティブをとることだ⁽³⁵⁾。

3.3. 社会主義革命の否定、修正資本主義への期待

さらに、興味深い論点に言及しておきたい。それは「社会主義革命」についての視点である。どうしても読み取れない箇所を _____ としてある。

「純粋な」資本主義は、日本経済のニーズにとって _____ をもつだろうか？ 地方はいまだに半封建的である。社会的・経済的改革の必要性。地主階級はあまりにも寄生的である。しかし地方の大衆は後進的である。都市部の大衆はよりラディカルである。したがって都市と地方のギャップは経済的にも政治的にも大きい。鈴木は、封建的な _____ を流動化するため、何らかの社会化された日本資本主義の到来を希望している。さもなくば国民経済セクターは、共産主義の台頭に _____ することになるだろう。

日本に社会主義革命が差し迫っているという考えは、まったく空想的である。人民はあまりにも天皇に傾倒していて、戦争について彼を責めることはないし、日本では〔革命は〕起こりえない。軍は政治的に財閥よりも強い。軍と右翼勢力が実際に日本を支配している⁽³⁶⁾。

鈴木とノーマンにとって、少なくとも敗戦直後の段階では、日本には社会主義革命は起こりえない。日本国民は後進的、反動的な性質を未だもっているのです、それは時期尚早である。当時鈴木が求めていたのは社会主義ではなく、一種の修正資本主義であった。現在は軍よりも財閥(経済)が弱い、財閥側が軍よりも強くならなければならない、という意味だろうか。このくだりのあと、「進歩的(progressive)」「有望(hopeful)」な資本主義者の例として、帆足計(重要産業協議会事務局)、渋沢敬三(日銀総裁)、藤山愛一郎(商工会議所連合会会長)らの名が挙がっている。「中間層」の指導のもと、これらの若く清新な資本主義者たちが働くのが望ましいと鈴木は言う。「社会化された資本主義」という表現には、「ニューディール」の響きがある。自由放任の資本主義ではなく、場合によっては市場に介入する資本主義ということだろうか。同席していた都留は賛同したのだろうか。

これ以上の推測は控えるべきだが、確実なことは、ノーマンや鈴木らが社会主義や共産主義的な革命ではなく、もっと現実的で穏当、保守的、漸進的なやり方を目指したということである。また天皇制の問題についても、原則論として共和制が望ましいが、国民には未だその準備ができておらず、今すぐ天皇制を廃止するのは無理だということについては、「いま共和制にしておかなくて大丈夫か？」と問うたノーマン側がむしろ鈴木に説得され、現状認識を共有していた⁽³⁷⁾。それはアイリーン宛の手紙の最終段落にもはっきりと表れている。

個人的には、日本の左派リベラル連合にとって、皇室を攻撃するのは時期尚早だと思います。高官や警察や右翼集団（これらはいまだに強いです）のページを要求したり、皇室の最小限の改革を要求したり、皇室制度の神話や神話的なものを廃し、合理的・科学的な歴史を要求したほうがよいでしょう（鈴木教授や高木教授は、左翼ではまったくありませんが、この最後の点を強調しています）。これらの要求は反動主義者には激しく抵抗されるでしょうが、攻勢に出ている進歩派は、天皇を廃止することよりも、このプログラムによって幅広い支持を勝ち得るでしょう。まだ日本人には、天皇制を廃止する心の準備が、あるいは政治的な準備ができていないのは確かだと思います。

連合軍はこの闘争には中立を保つべきですが、しかし反動主義者を何らかのしかたで抑制しながらそうすべきです（この手の中立性はいまやよく認識されるものでしょう）。彼らは自由民主主義者を支持するにあたって前面に出るべきではありません。[そんなことをすれば]自由民主主義者はこの問題ではっきりした支持を強められることよりもっと困惑するでしょう。占領軍は、私の見解では、最悪の要素をページするという消極的な仕事に徹し、あとは日本人に任せるべきです。もちろん、日本人が自分たちで最悪の要素を除くことができればそれに越したことはありませんが、しかし彼らはまだ適切な政治的機構やノウハウを持ち合わせていないようです⁽³⁸⁾。

ノーマン自身も、日本資本主義論争における「講座派」に近い歴史観をもっていたとは言えるが⁽³⁹⁾、高木はともかく、鈴木は左翼（leftist）ではないと断定しているのが興味深い。

鈴木は鈴木でノーマンの質問に衝撃を受けたが、ノーマンはノーマンで鈴木「天皇制廃止は時期尚早」という見解に逆に説得されている。ただしノーマンにとって、懸念が消えたわけではない。ほぼ1年後に彼は、本国オタワの外務大臣に宛てた報告書で、「この草案が、降伏いらい権力の座にあった日本人の手で作成され得たいかなる草案よりも格段にリベラル、かつ前向きのものであることは明らか」と評しつつも、「現在の日本政府が、やがて占領軍からの圧力がなくなった段階では、保守勢力がこの草案の重要部分についてSCAP（連合軍最高司令官）のみならず日本人自身が期待していたよりもはるかにリベラルでも民主的でもない解釈をすることができるよう、わざと曖昧さを組み込もうとしている」のではないかという疑いを表明している⁽⁴⁰⁾。

3.4. 日本国憲法への影響

結果的に、ノーマンと鈴木の間談は日本国憲法の内容にどれほど影響したかについて最後に確認しておきたい。

鈴木は長年にわたる一貫した証言によれば、ノーマンが「この機会に天皇制を廃止しなくて大丈夫か、また反動的軍国主義者が復活する芽を残すのではないか」と言うので、その危険性を認識し、「なるほど立憲君主制よりも共和制のほうが理にかなっている」と考え直した。しかしながら、実際に憲法研究会案が共和制案になったわけではない。鈴木が受けたのは思想的な影響であって、ノーマンが日本国憲法に直接介入できたわけではない。逆にノーマンの側では、当初天皇制廃止が本当は望ましいと考えたにせよ、「今すぐの天皇制廃止は国民的合意を得られない」との鈴木の見解に結局納得している。

結論として、この会談によって、憲法研究会案の文言上に直接影響があったとは確認できない。とはいえ、鈴木が繰り返し証言しているように、鈴木の主観においては「愕然とした」のであり、さすがにまったく影響がなかったとも言えない。ノーマンとの知的交流を通じて間接的に鈴木の考えが変化し、それが日本国憲法に反映された可能性は十分ありうるが、結局2人は通常研究者がするような情勢分析・意見交換をし、相手を説得したり、説得されて自身の認識を改めたりした、つまり「いくつかの示唆をうけた」にすぎない。

あるいは、ノーマンの示唆によって活動の意欲を掻き立てられたということはあることである。実際に鈴木は、翌10月以降、新聞・ラジオなどに、憲法改正にまつわる論説を精力的に発表している⁽⁴¹⁾。

ノーマンの存在や言動が憲法草案に最も大きく影響したとすれば、単純に、自身の鈴木への信頼をラウエルやエマーソンを含むGHQ側に伝達していたことが大きいかもしれない。ただしそれも、ノーマンが言ったからGHQが鈴木を重視したというよりは、ただ彼らの自由主義的・民主主義的な思想そのものが、ポツダム宣言と合致する普遍性をもっていただけのこととも考えられよう。

憲法論議はイデオロギーのバイアスを受けやすい。日本国憲法は「押しつけ」なのか、そうでないのかという問題について、1961年の憲法研究会小委員会の報告では「押しつけとは言い切れない」という結論が出ているが、この問題は今日も蒸し返され続けている。右派の論客はあくまでも日本国憲法はアメリカのアイディアだけでできていると言い、左派は日本人のアイディアが含まれていると主張する。憲法研究会案がGHQ草案の下案だということが確実となると、今度は右派は、憲法研究会案が外国人の思想から出発していると主張したいようである。

しかし上に見たように、実際のノーマンや鈴木安蔵の立場は、国際共産主義といった教条的で過激なものではなく、普遍的な近代市民革命を念頭に置いた、それなりに地に足の着いたものであった。このことはすでに十分確認できたと言えよう。

4. 結論

以上、従来資料に加えて新たにノーマン日記と都留日記を検討した結果、以下の3つのことが論証できたと考える。(1) 事実関係。ノーマンと鈴木が戦後最初に会談した日時は、1945年9月23日(日)である。都留重人宅に滞在していたノーマンを、鈴木が訪問したのである。(2) この会談時点で鈴木が新しい日本に期待していたのは、天皇制廃止ではなく、進歩的な「中間層」の出現であった。鈴木もノーマンも、社会主義革命は期待せず、社会化された資本主義の到来を期待していた。また、(3) ノーマンが鈴木と接触することにより、日本国憲法の内容に何らかの間接的影響があったということは事実であろうが、他方、ノーマンが国際共産主義者であり、日本国憲法を外部から変容させるために一方的に介入した等という非難はあたらない。以上の3点である。

一部の右派論客は、日本国憲法が日本人の発案でないということを言うために、ノーマンが一方的に思想注入をしたと思込もうとしている。ときにはアメリカから指示されたWGIP(War Guilt Information Program)を、あるいはときにはコミンテルンから指示された共産主義思想を。しかし本稿で取り上げてきた資料に基づけば、それらはいずれもかなりの的はずれな虚妄にすぎない。一例を挙げよう。

ノーマンは戦後すぐ、1945年9月の始めに早々と来日しています。真っ先に行ったのが、旧知の経済学者で親友だった都留重人とともに、戦前に語学官として来たときに知り合ったマルクス憲法学者、鈴木安蔵を探し出します。鈴木安蔵さんというのは、世田谷の池尻に近い駒留神社の近くにお住まいで、今もご遺族といえますか、娘さんたちがお住まいです。敗戦から1ヶ月余りの9月22日、そこにGHQのジープで乗り付けて、真っ先に鈴木安蔵さんのところに行きます。日本で最初にやったのが広州から復員したばかりの鈴木安蔵さんを訪ねたことです。これは、鈴木安蔵さん自身が回顧しているのですけれども、ノーマンが来まして、「今こそチャンスだから、本当の憲法を作り直すべきだ。それをなしうるのは在野の憲法史家・鈴木さんあなただ。あなたがやらんでどうするんだ？」というようなことを鈴木安蔵さんに言ったようです。それから「憲法研究会」という民間の憲法試案を作るグループができて、そこで実際の草案作りを始めるのです。私がここで申し上げたいのは、そもそも鈴木安蔵さんが自分の意思で行ったのではなくて、発端はノーマンなのです。ノーマンが訪ねて初めて、鈴木さんはこういったアクションを起こしたということです⁽⁴²⁾。

大まかなところは間違いでもないが、本稿で明らかにしたように、実際にはノーマンが鈴木を訪ねたのではなかった。この住所も当時鈴木が住んでいた場所(世田谷区下馬)

ではない。またノーマンが憲法研究会の発端となったという認識も誤りである——憲法研究会は1945年10月29日、日本文化人連盟設立準備会の席上で高野岩三郎が初めて発案したのである。さらにこのノーマンの台詞は、おそらく鈴木安蔵を主人公とする映画『日本の青空』からの借用ではないか。それはドラマ上の脚色であって、もととなる記録はどこにもない。

このような資料軽視と曖昧さの中に、誤った見方や、陰謀説のつけこむ余地がある。本稿で示した具体的なノーマンと鈴木との会談内容は、こうした結論ありきの決めつけが、いかに荒唐無稽なストーリーに接続するかを証示しているのではないだろうか。歴史研究において仮説を立てることは必要不可欠だが、できるかぎり事実と証拠をベースに探求を進めるべきことは言うまでもない。

注

- (1) 憲法研究会のメンバーは、提出された案に記名されているのは、高野岩三郎(大原社会問題研究所所長)、馬場恒吾(ジャーナリスト・評論家)、杉森孝次郎(早稲田大学教授)、森戸辰男(大原社会問題研究所、高野の弟子)、室伏高信(ジャーナリスト・評論家)、岩淵辰雄(政治評論家)、鈴木安蔵の7名である。このほか回によっては、鈴木義男、三宅清輝、今中次麿などが出入りしていた。
- (2) これまでの諸研究には、当時直接草案起草の関係者であった入江俊郎、佐藤達夫、佐藤功、金森徳次郎らの記録、50年代の憲法調査会関係者の高柳賢三、大友一郎、田中英夫らの著書と憲法調査会報告書、その他たとえば深瀬忠一、金子勝、犬丸秀雄、西修、佐々木高雄、古関彰一、等々の多くの研究があるが、憲法研究会がGHQ案に影響したという点を否定するものはない。
- (3) 高柳賢三・大友一郎・田中英夫「幕僚長に対する覚え書き——〔案件〕私的グループによる憲法改正草案に対する所見」『日本国憲法制定の過程』I 原文と翻訳、有斐閣、1972年、26-39頁(対訳)。
- (4) トルーマン・ライブラリー所蔵。NHKスペシャル『日本国憲法の誕生』(DVD、2007年)にて紹介されている。
- (5) 「総司令部案の起草過程においては松本案を初めとして日本側の憲法改正諸案はほとんど影響を与えていないというべきであるが、ただ憲法研究会案のみは総司令部案の起草者によって相当に重要視され参照された。すなわち……それは日本側の諸案のうち、総司令部案に最も近いものであり、また現に総司令部案の起草者の一人であったラウエルが起草してホイットニーから1946年1月11日付け、幕僚長に提出した『私的グループによる憲法改正草案に対する所見』と題する覚書によれば、ラウエルが『ある私的グループによる憲法改正草案』とよんでいるものはこの憲法研究会案であることは明らかであり、かつ、ラウエルがこの案をきわめて重視し、注意深く研究した上で、その各条項について彼の意見を加えたものをホイットニーに提出したこと、そしてこの彼の意見が総司令部案にほとんどすべてとり入れられていることが明らかである」(憲法調査会小委員会報告書『日本国憲法制定の由来』時事通信社、1961年、249頁以降)。またアメリカ側の研究でも、「憲法研究会の改革提案は、直接かつ実質的に、民政局から2月半ばに出てきた草案に影響したと結論づけてよ

いだろう」とされている。Dale M. Hellegers, *We, the Japanese People: World War II and the Origins of the Japanese Constitution*, Stanford University Press, Stanford: California, 2001, vol. II, p. 504.

- (6) 大窪愿二「覚書 ハーバート・ノーマンの生涯」『ハーバート・ノーマン全集』第4巻、岩波書店、1978年、551–600頁。
- (7) 鈴木安蔵とノーマンは、いずれも1941年1月より伊東治正伯爵家で行われた、尾佐竹猛(大審院判事・歴史家。吉野作造や宮武外骨らとともに「明治文化研究会」を設立する)、美濃部達吉、佐々木惣一など錚々たる顔ぶれの「憲法史研究会」に参加していた。原秀成『日本国憲法制定の系譜』、I–III、日本評論社、2006年、第I巻101頁；第III巻191頁。この人脈は、吉野作造門下の「明治文化研究会」ともつながり、後述する宮武外骨(反骨のジャーナリストとして知られる。滑稽新聞、新聞など時の権力批判と発禁・逮捕を繰り返した)ともつながる。なお小西豊治は、鈴木安蔵自身やその研究対象である植木枝盛の存在を、ノーマンがラウエルに紹介したと見ている。小西豊治『憲法「押しつけ」論の幻』講談社(現代新書)、2006年、103頁以下；第6章。
- (8) 都留重人は、ノーマンにとって最も親しい友人の一人である。2人は30年代にハーヴァードで知り合い、ともに日本の政治経済的な近代化をテーマに研究を進めた。ノーマンの博士論文『日本における近代国家の成立』を手助けしたのも都留である。
- (9) 鈴木安蔵『憲法制定前後』青木書店、1977年、73頁。ただし「大使館の書記官」は鈴木木の誤認で、正しくは「公使館の語学官」である。
- (10) 鈴木安蔵「憲法改正の根本論点」『新生』12月号、1945年、23–24頁。
- (11) 「一つたしかなのは、かれ〔近衛〕が何らか重要な地位を占めることを許されるかぎり、潜在的に可能な自由主義的、民主主義的運動を阻止し挫折させてしまうことである。かれが憲法起草委員会を支配するかぎり、民主的な憲法を作成しようとするまじめな試みをすべて愚弄することになるであろう。かれが手を触れるものはみな残骸と化す」(ノーマン「近衛文麿」『ハーバート・ノーマン全集』第2巻、増補版、岩波書店、1989年、346頁)。
- (12) 古関彰一『日本国憲法の誕生』増補改訂版、岩波書店、2017年、41頁、注9。なおこの鈴木日記は、鈴木安蔵門下の金子勝・立正大学名誉教授によれば、残念ながら現存を確認できないとのこと。
- (13) 鈴木安蔵『憲法学三十年』評論社、1967年、210頁。
- (14) 大窪愿二は、日本太平洋問題調査会事務局を経て駐日カナダ大使館勤務で、本学会設立の功労者でもある。ノーマンの活動を公私にわたりサポートし、ノーマンの死後はノーマン全集を編纂した。大窪愿二追悼集刊行会編『追想 大窪愿二』大窪愿二追悼集刊行会、1987年参照。
- (15) “I met Suzuki Yasuzo to-day, the scholar who helped me in finding books on constitutional history. His views were most interesting and practical.” E. Herbert Norman to Irene Norman, 25 September 1945, Tokyo (Japan), Box 1 File 8, Norman Family fonds, University of British Columbia Library Rare Books and Special Collections, Vancouver, Canada.
- (16) E. Herbert Norman, Notes from Tokyo visit [ca. 1945], Box 7 File 2, E. Herbert Norman fonds, University of British Columbia Library Rare Books and Special Collections, Vancouver, Canada.
- (17) 高木八尺は、東京帝国大学教授。ノーマンとは戦前より太平洋問題調査会(IPR)の活動などを通じて交流があった。

- (18) 西田長壽は、当時館長であった宮武外骨の助手。西田長壽『明治新聞雑誌文庫の思い出』《リキエスタ》の会、2001年参照。
- (19) 外骨は一時、姓を廃すと宣言し「廃姓 外骨」を名乗っており、ノーマンはそれをそのままにメモしている。なお著者の調査によれば、現在 UBC に寄贈されているノーマンの蔵書のうち、最も冊数の多い著者こそ宮武外骨であるという事実を付記しておく。
- (20) E. Herbert Norman, Notes from Tokyo visit [ca. 1945].
- (21) “I have visited the Imperial University, seen the Meiji Library (all the most valuable left-liberal journals and collections of that era were sent to the country for protection). I met the old curator who remembered me and who said “I’ve been opposed to militarism all my life (it’s true his writings are quite anti-militarist) and now my house is destroyed and I’m living on beans at the age of 84. I hope you give the militarists hell”. E. Herbert Norman to Irene Norman, 25 September 1945.
- (22) 吉野孝雄『外骨戦中日記』河出書房新社、2016年、217頁。
- (23) 原、前掲書、第 III 巻、200 - 201 頁、および注 489。
- (24) 一橋大学経済研究所資料室所蔵、都留重人名誉教授寄贈資料、Aa-30、1945年9月22日の部分。
- (25) Elliot, Major S.R. *Scarlet to Green: A History of Intelligence in the Canadian Army 1903-1963*, second edition, Friesen Press, 2018, p. 369; pp. 481-482.
- (26) 吉野、前掲書、218頁。
- (27) 当時都留夫妻は、妻正子の父・和田小六郎の敷地内に、和田小六の兄・木戸幸一内大臣とともに住んでいた(都留重人『いくつもの岐路を回顧して』、岩波書店、2001年、204頁)。原秀成は、都留からの私信にもとづき、ノーマンが都留を訪ねた日程を9月11日(火)、あるいは9月15日の数日前、としているが結局ははっきりしない(原、前掲書、第 III 巻、199頁)。他方ノーマン日記には、ノーマンが9月13日(木)に初めて和田家を訪れたこと、その場に都留重人と嘉納履方(ノーマンの友人、同盟通信社記者、嘉納治五郎の三男)がいたことなどが明確に記されている。
- (28) 「それから、もう一つ関連しましてね、総司令部自身のことではありませんが、カナダのノルマン氏、これとは戦争前から深い関係があって、終戦後も、彼はいち早く連合軍の一員として来日し、総司令部のなかに一部屋をもらっていました。日本に来たときに、直ぐに都留君を通して、私の家にも来たし、私も数回ノルマン君を訪ねました」(憲法調査会、憲法制定の経過に関する小委員会第 21 回議事録)。
- (29) 鈴木安蔵「憲法改正の根本論点」『新生』新生社、1946年1月号、23頁。
- (30) たとえば「日本政治の封建的背景」の特に第 5 章「福岡玄洋社——日本帝国主義の源流」や、「日本における過激国家主義団体の概要」(いずれも『ノーマン全集』第 2 巻所収)。
- (31) 憲法調査会、憲法改正の経過に関する小委員会、第 21 回議事録。
- (32) 鈴木安蔵「日本国憲法制定前後」、遠山茂樹編『自由民権百年の記録——自由民権百年全国集会報告集』三省堂、1982年、72頁。
- (33) 「ヴァンシターチズム」は、スウェーデン語の“Vänsterism”すなわち「左翼主義 leftism」か。
- (34) 一橋大学経済研究所資料室所蔵、都留重人名誉教授寄贈資料、Aa-30、1945年9月23日の部分。

- (35) E. Herbert Norman, Notes from Tokyo visit [ca. 1945], Box 7 File 2, E. Herbert Norman fonds, Sep. 23th, 1945.
- (36) Ibid.
- (37) ノーマンは天皇制について、原則的にはもちろん廃止が望ましいと考えていたが（「日本の将来——カナダ側の見解」『ノーマン全集』第1巻増補版）、しかしあくまで連合国側がそれを強制すべきではなく、日本人自身に「改革」あるいは「離乳」を促すべきとしていた（「天皇制について」『ノーマン全集』第1巻増補版）。1945年6月時点で、コロンビア大学が支援する「応用社会研究局」なる団体のアンケートに対する回答において、ノーマンは連合国側が直接手を下す方法を否定している（工藤美代子『スパイと言われた外交官——ハーバート・ノーマンの生涯』筑摩書房、2007年、169–172頁）。したがって鈴木が天皇制存置という見解を述べたことにノーマンが同意したのは、急に考えを改めたということではない。日本人の見解を尊重し、純粋に同感したものと考えられる。
- (38) E. Herbert Norman to Irene Norman, 25 September 1945, Tokyo (Japan), Box 1 File 8, Norman Family fonds.
- (39) 1930年代には、マルクス主義経済学の立場から日本の資本主義をどう理解すべきかについて、「日本資本主義論争」という論争があり、その文脈の中で「講座派」と「労農派」が対立していた。講座派とは岩波書店「日本資本主義論争発達史講座」に執筆していた人々の立場で、明治維新を近代市民革命とは捉えず、むしろ王政復古と捉える。したがって彼らにとっては、明治政府は半封建的な絶対王制であり、目指すべき革命はまずは市民革命である（二段階革命論）。他方、非共産党系雑誌『労農』に集った労農派にとっては、明治維新は「不徹底な市民革命」であり、目指すべきは社会主義革命である。鈴木は実際に「講座」の執筆者であるし、羽仁五郎の指導を受けたノーマンの『日本における近代国家の成立』も、たしかにこちらの認識に近いと言える。
- (40) 「憲法草案の審議状況」『ノーマン全集』第2巻、440–443頁。
- (41) 『東京新聞』1945年10月16～18日、「憲法改正」を3日にわたって連載したのをはじめ、新聞インタビュー、NHKラジオ、雑誌『新生』や『改造』など。またそれらを再録した著書『民主憲法の構想』（光文社、1946年）。
- (42) 岡部伸「ノーマンと『戦後レジーム』——近代日本を暗黒に染め上げた黒幕」『比較法制研究』国士舘大学、2015年、第38号、101–122頁。岡部氏は産経新聞編集委員。

(なかの まさひろ 青山学院大学)

The First Postwar Meeting of E. H. Norman and Y. Suzuki: The Significance and Facts

Just after World War II (WWII), the prominent Canadian diplomat / Japanologist E. Herbert Norman visited Japan and worked for General Headquarters / Supreme Commander for the Allied Powers (GHQ/SCAP) directed by General Douglas MacArthur. He arrived in Tokyo in early September 1945 and soon met with Yasuzo Suzuki, a constitutional scholar. This meeting, mediated by Shigeto Tsuru, Norman's close friend and an economist from Harvard, is deemed to be historically important, as it might have influenced the constitutional draft of Kempo-Kenkyukai to a certain extent. Kempo-Kenkyukai was a private group of Japanese intellectuals such as Suzuki, Iwasaburo Takano, Tatsuo Morito, Tatsuo Iwabuchi, Koshin Murofuse, etc. Its draft was carefully examined by the Chief of Judicial Affairs Milo E. Rowell, and his report was submitted to Courtney Whitney, Chief of the Government Section of GHQ. They used this document as the basis of GHQ's draft, which was later transformed into the current Constitution of Japan. Therefore, logically speaking, Norman and Suzuki's meeting may have influenced the spirit of the Japanese Constitution. Suzuki stated that Norman's question regarding the new constitution and the Emperor system alarmed him, but he did not provide a detailed explanation on his view.

In this paper, to discover the extent of this meeting's impact, I have referred to rarely examined unpublished manuscripts: Norman's diary entitled "Tokyo Trip," owned by the University of British Columbia (UBC), and Tsuru's diary owned by Hitotsubashi University. Besides these, Norman's movements during September 22–25, 1945, were traced from the published diary of Gaikotsu Miyatake, the curator of Meiji Bunko Library at the Imperial University of Tokyo. As it turned out, the date of the first Norman–Suzuki meeting was not Saturday, September 22, as is generally believed and as Suzuki and his interviewer Shoichi Koseki have testified. In fact, the meeting occurred on the morning of Sunday, September 23. Moreover, it was not Norman who visited Suzuki, as is widely believed. It was rather Suzuki that visited Norman who was staying at Tsuru's home. This fact is the first finding of this paper.

Between 1945 and 1982, Suzuki repeatedly described his conversation with Norman in the following manner. He expressed his view on the Emperor (*Tenno*) System, stating that it was too early for the Japanese public to accept the idea of

the abolishment of *Tenno* and that the only way forward for Japan at the time was to institute a constitutional monarchy similar to that of the UK. Norman questioned this opinion because the bourgeois revolution had never occurred in Japan as it did in the UK. He indicated the danger of the regrouping and development of reactionary right wing-militarist groups all over Japan if *Tenno* was sustained. Suzuki was shocked and became aware of the potential danger of the Emperor system, thereby being convinced that the republican system would be reasonable in principle, as Takano had insisted.

The second contribution of this paper is to reveal more details of the conversation that occurred at the Norman–Suzuki meeting. The descriptions inscribed in Norman’s and Tsuru’s diaries of this part of September 23 confirm the above story, and also elucidate Suzuki’s views in more depth. Suzuki hoped that the sustenance of the Emperor system would cause the rise of middle (*chukan*) strata comprising progressive-minded intellectuals, skilled workers, etc. He felt that this group should work for the civil services and should replace the current reactionary groups at the bureau and at the Imperial Court. Suzuki believed that this progressive *chukan* strata should lead postwar Japan because of the backwardness of the masses, especially in the rural regions.

Interestingly, Suzuki and Norman, who were often considered to be Marxists / socialists / communists or at least sympathizers of such beliefs, did not desire or anticipate any socialist revolution in Japan during this conversation. They believed that the idea was too unrealistic; not only Suzuki but also Norman thought that the Japanese would not give up *Tenno* in the near future. They hoped that “progressive” capitalists such as Kei Hoashi, Keizo Shibusawa, or Aiichiro Fujiyama would support the *chukan* strata who would lead the masses step by step.

This fact leads to the third point that this paper intends to emphasize: Some right wing writers use the same logic as that of anti-communist McCarthyism to condemn Norman even now, saying that he was an international communist spy who intervened and distorted postwar Japan’s governmental system and constitution. Although it is true that Norman was associated with a communist group in his Cambridge days, he did not one-sidedly impose any communist notions on Suzuki or on the new Japanese constitution and its creation process, at least not in 1945. This fact is evidenced by Norman’s and Tsuru’s diaries, on which this paper relies.

(Aoyama Gakuin University)